

明治

40-4



第三廿三

●ふ乞を記附御旨るた見てに『ゑづみ』は節の用御へ主告廣●

新洋風挿畫研究會

一、本會は有志と共に最新歐米風挿畫法を研究し挿畫及挿畫印刷の如く發展を計ると共に挿畫家をして全然油畫、水彩畫家と歐米の如く分離せしむるを以て目的とす
本會は全然歐米美術學校挿畫専門級の研究法に倣ひ（モデルを用ひ）初學より書籍及雜誌挿畫法を研究す
研究科目を大別し左の三種とす

一、挿畫科 木炭 挿畫
木 ベンシヤン 挿畫
彩色 挿畫
鉛筆 挿畫
スチル 挿畫

二、挿畫科 ワッシャン 挿畫
色鉛筆 挿畫
スチル 挿畫

三、洋風浮世畫 其他 挿畫
色鉛筆 挿畫
スチル 挿畫

書誌(網目版)(表紙) 美術雑誌

要目

方

寸

第一卷 第三號
七月二十日發行
定價一部拾貳錢

東京市中央區市谷町一丁目
東京市小石川町
大莊野宗之助
磯部忠一

菱(全上)

隣の庭(着色刀畫)

おくつき(網目版)

途上小觀——雨やどり(ゼラチン版着色)(附錄)

海邊の生活(ゼラチン版着色)(附錄)

現代の滑稽畫及諷刺畫に就て

大島に往つて來ての話

故橋本邦三君

席間餘談

洋風挿畫専門研究會

代表者

戸張孤雁

○八月一日より開會○
(本會に關する通信往復は日本橋
小田原町十八番地戸張宛の事)
東京神田區三崎町三丁目一番地(南横町十二號)
上
但男女とも會員たる事を得
初學者にて挿畫専門家たらんと欲する人の爲めに特別科を置く
納の事
會員たらんと欲する者は束修金壹圓、會費として毎月金壹圓前
當分の内毎週木、金、土の三日を研究日とし午後一時より四時まで
開會す當日戸帳孤雁出張補助す
但研究者の都合に依り變更する事有るべし
會場は神田區三崎町三丁目一番地(南横町十二號)洋風挿畫研究會
の事

地番八町林木駄千込駒區郷本

社

寸

方

みづゑ第二十三要目

前號要目

- 丘の細道(水彩畫原色版)……………大下藤次郎
版のなぐさみ〔二〕……………山本 鼎
主觀と客觀……………大下藤次郎
橋(水彩畫寫眞版)……………トーマス、ギルチン
アルフレッド、イースト氏の寫生談(完)……………石川欽一郎
新月(水彩畫石版)……………大下藤次郎
トーマス、ギルチン〔上〕……………青 人
菱花灣日記〔三〕……………汀 鶯
△口繪丘の道……………大江製版所
△新月……………山田石版所
其他寄書……會告……問答、讀者の領分、要塞地寫生案内等數項
△寫眞綱目版……………秀英舎第一工場
項寫眞版數葉



卷之三

七

一
二
三
四
五
六

置
人

七

一
二
三
四
五
六

大
不
重
失
理

一
二
三
四
五
六

一
二
三
四
五
六

一
二
三
四
五
六

一
二
三
四
五
六

一
二
三
四
五
六

一
二
三
四
五
六

一
二
三
四
五
六

一
二
三
四
五
六

一
二
三
四
五
六

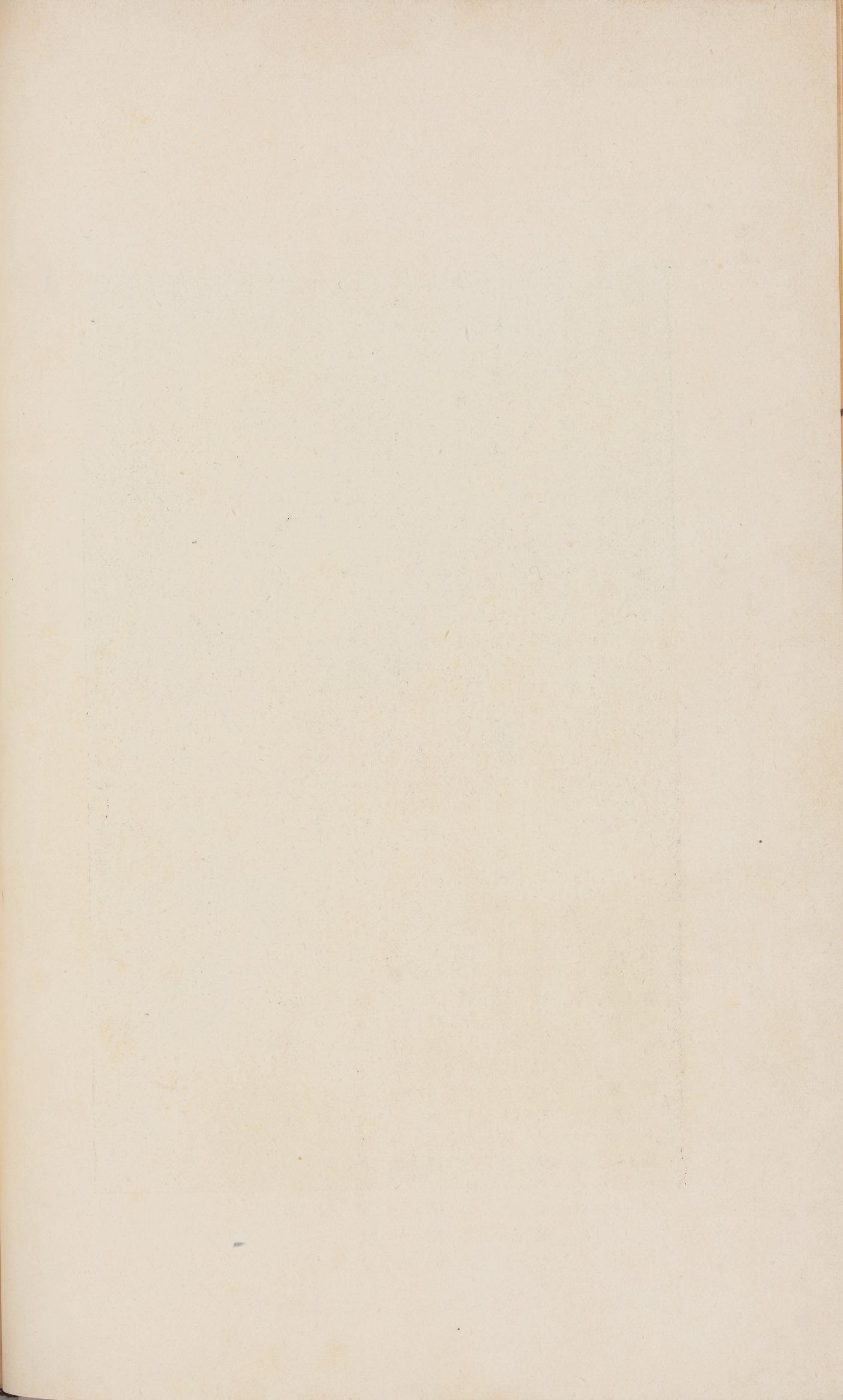
一
二
三
四
五
六

一
二
三
四
五
六

一
二
三
四
五
六



T. OSHITA
1924



み
づ
ゑ

第二十三

明治四十年四月三日發行

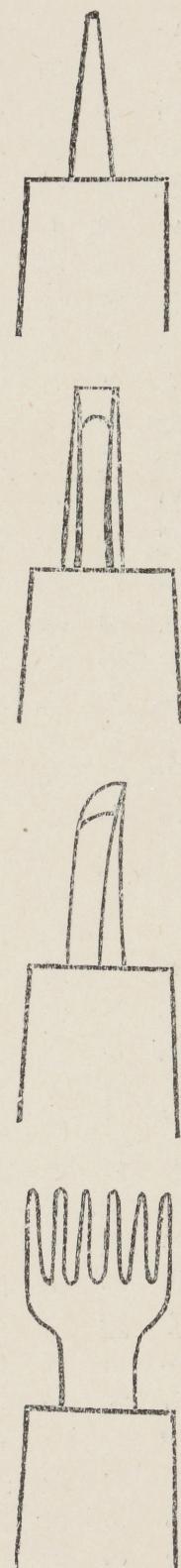
版のなぐさみ

白聖ヨーク版

山本 鼎

或日新聞社の編輯局を訪れてみると。今日横濱から西洋人が来て白聖版ヨーク材料の」といふもの、見本を置いて行つたから君一つ試して見ないかといふ。白聖版とは初めて聞く名稱なまえどんなものであるかとやがて取り出されたのを見ると、面積十五坪（一坪は一寸四方）厚さ七厘ばかりの鋼鐵板の上に、純白な白聖が一分程の厚みに布き展べられてあるもの、それに添えて四五本の彫刻針がある。針の尖は異つて居て、或は錐の様な、或は螺旋の様な、或は又肉叉の様な歯がつけてある、殊に一本の針には空氣を壓出するための護謨球が附いて居た。聽いて見ると此の白聖版といふものは、西洋の新聞紙にはかなり古くから用ひられて居るものだ。そこで、針の尖で書いた書が直ちに版になつてしまふといふ、輕便至極なものである。然し實際やつて見ると一寸面倒な所もある、といふのは、此彫刻せられたものが直ちに印刷せらるゝといふわけにはいかず、それをするには是非共凹版を凸版にしなければならない、それに白聖の面には繪畫のアウトラインをほんの當りに印しておく位なもので、それも彫りゆくうちに白聖と共に崩れ去るから下書といふものも確かに作つておかねばならむ。僕の初めての経験は雪中に土人が熊と鬪ふの書であつた。下書を見ながら針を白聖に彫り込んでみると案外に脆い。氣が引けるやうに彫るに従つてぼろぼろと崩れ、針をぬくと其跡を埋めてしまふ。此時にはじめて肉叉の様な針と護謨球の効用を思ひ當つた、即ち書の密な部分は

此肉叉状の針で白堊を搔き退けて薄くし、彫刻針の尖へは彼の護謨管を附け、左手に球の空氣を壓出して崩れ来る白堊の粉を吹き拂ひながら彫刻してゆくので。かくすれば鐵板に密接した部分の柔靭性を帶びた白堊が鮮かに削れて、碧灰色の鋼の針尖に伴れて現れてくるのが明瞭はつきりと見えて来る。此場合は殆んどペン画を作る時の心持とかわりがない、たゞ針の形に由て太細の線が意にまかせぬといふとがある、然しこれは針の數さえ増せばなんのとはないのである。針は銀座三丁目の「近常」に多分ある、けれども疊針、若しくは時計の鉤をなをしたもので充分間に合ふ、そして針の種類も左の四本があれば凡その用には足りるものである。



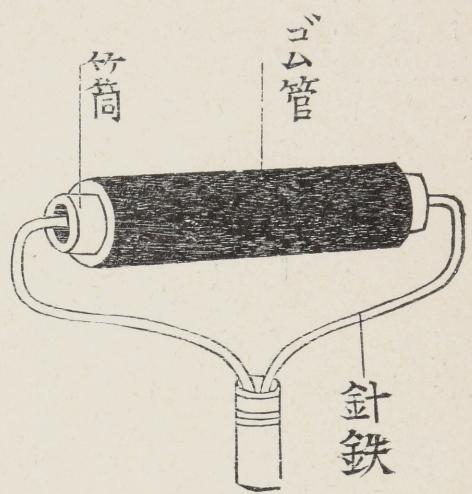
又護謨球は醫家の用ふるスレンジで事足りやう。只困る事は白堊の板である、これは横濱の商館から取りよせねばならない、若し諸君のうちに需めらるゝ方があるのであるなれば僕が買ひ出しの勞をとつてもよろしい。僕の試作は三十分ばかりで出来たが、これを印刷するが爲には彫刻されたV形の溝に溶解した鉛を注ぎ込んで、A形なステロイ版にした。此版に取るについては、白堊に含んでおる水分を充分に乾燥してから、されば原版復版共に目茶々々なものになつてしまふ。此ステロイ版も素人出來んとではないけれども格別技術上に興味もなく、道具だても少々面倒であるから専門家に依頼する方がよい。専門家は市中所々にあるが、數寄屋橋外の「製文堂」などには熟練した技術家が居るといふとだ。要するに此白堊版といふものは線画に限るものであつて、且つ凹版をするといふ手數があり、目下の處材料も極く軽便には得るとが出來ないのであるから、素人は甚だおづくうな事に思はれるであろう。而しながら四五本の針を以てペ

ン畫若しくは鉛筆畫の經驗を直ちに應用し得るといふ性質が、既に素人のなぐさみとするに不適でない事を示して居る。若しも一步進んで版畫の上に、針、白墨、鉛、等に由て成された一種の持性^{キヤラクタ}を味ひ、樂しみ得たならば蓋し幾多の不便ありとするも決して太儀ではないである。しかも白墨版は凸版であるから石版の如く印刷に不便でない、僅かな道具を以て自から印刷を試み得るといふ樂しみが添ふて居る。凸版の印刷法は殆ど知らぬ人の方が少いであらう、けれども用意のため左に記すととする。

凸版の輕便なる印刷法

勿論最輕便なのは手刷である。而して最精巧なのも又おそらくは手刷である。

印刷に水繪の具で刷るものと油肉^{インキ}でするものと二種あるが、僕は前者に就ては知識が甚だ乏しいから控えるととする。油肉は活版用のインキよりも石版用のインキの方が光澤もあり、硬度も良く、白紙などへの印刷に好適である。肉はなるべく使用時に少しづゝ出す様にし、常に入れ物の蓋を開けて置かぬやうにしたい。肉盤は石板或は硝子板が輕便である、それもなるべくは箱に入れて埃のつかぬ様に心掛ねばならぬ、出來得べくむば使用の後必ずルーラと共に氣發油で洗つて居るとよいのである。それから肉盤に肉をのばす時はまづ金箋で充分練り、然るのちルーラを轉がす様にするのが鮮明なる版畫を得やうとする第一の用意である。ルーラはリスリンとゼラチンで作つたものを最良とする。此の膠ルーラの良質なもので肉をつける時には、版面に埋れて居た肉をもきれいに吸ひとつてしまふ程であるから如何なる細密な線をも滅する事がない。然し之れを作るには餘程の熟練と、多少の器械を要するから素人にはちとおづくうである。されば皮ルーラ、或は護謨のルーラを用ひるがよからう。然し皮ルーラもなを最廉なるものにて五拾錢を拂はねばならぬから、僕は寧ろ護謨ルーラの輕便なる所を撰んで諸君に勧める、護謨は醫者の用ひる聽診器の管を五寸ばかりも求めて來ればよい。そして圖の如く造る。若し又是れが面倒となれば一層簡単な方法もある。それは油肉^{インキ}と艾^{モグサ}とをよく練り合して絹に包み、それを筒のやうなものに詰めて版畫をほ



ん／＼と叩いて肉をつけるのである。バレン之れは紙上から胡摺る道具であるが、やはり専門家の用ひるやうなものは高價なものであるから僕の用ひて居るものをお紹介致さう。まづ桐の薄板(玉子の折などによし)を直徑二寸丸位にきり、一方の面の(摩擦せざる方の面)圓邊を一分通り位、圓邊に向つて坂下しに削り下げ、又一方の面には鈴虫に馳走する茄子の様に十文字に刀を入れる。而してそれを竹の皮で包むのである。竹の皮は三分間ばかり水に浸したるのち、皮裏を貝の脊中見たやうなものでよく胡摺つておくのがいい。それから此バレンで印刷してな

を黒々とつきかれるつぶしのやうな部分は籠を用ひる。之れは金籠かね。若しくは裁縫に使ふ籠。或は又爪の甲などでも差支へない。用紙は、素人の手刷には、白紙、或は畫箋紙が適當である。そして注意して砂のない紙を

撰ばぬと版面を害する事がある。(白堊版了り)

*

*

*

*

*

*

*

主觀と客觀

大下藤次郎

繪を學ぶ順序として、初めには自然に對し極めて忠實に寫生し、充分研究したる後は、其修養の力を利用して、自己の思想によつて、敢て自然なるものに束縛せらるゝとなく自由に手腕を揮ふべきものであるとは、一般に認められてゐる說である。

さて其忠實なる寫生といふとについても、主觀と客觀の別があつて、其論旨は一見矛盾してゐる様に見える。

曰く自然を眼に見ゆる通りに有の儀を描け。自然を一の臨本と思へ。高低深淺等の考を去れ。各種の色の點綴せられしものと思へ。菜の花をば單に黃なる色ありと思へ。其菜たり大根たり、花たり葉たるを問ふの要なし、即ち物を見ずして色を見よ。一朶の雲、それは層雲たると卷雲たるとは知るの要なし、否雲なりと知るにも及ばず、只其形と色を見れば可なり。一叢の森林、そは槲なるか杉なるかと究むるのは愚なり、只々其觀察力を密にして、其形體を誠實に描寫せば足れり。科學の知識の如きは、却て心に疑を生じて、往々自然の眞相を見る眼を掩ひ害をなすこと少なからず。

主觀を去れ。主觀の爲め欺かれて、其時實際自からぬ雪をも白く書き、黃なるべき火を赤く書き、甚しきは草は綠なりとの觀念の爲めに、草といへば何でもグリーンを抹し、紅葉といへば無闇にレッドを塗る、これ皆習慣的に自己の想像を重んずるが爲めなりと。

他は曰く、物を寫す時は、自己先づ其物の心持になれ。岩は硬し、雲は柔かなり、松は松、竹は竹、各其物の特性あり。春は春といふ觀念を忘れずに筆をとれば、其畫には自然に春らしき趣を得べし、秋は秋なりとの心持にて寫せば、何となく淋しく冷やかなる感は畫面に現はるべし、單に見た通りを寫すは易々たるとにて、そは寫眞なり死畫なり、寫すべきものゝ精神を描き現はすを得ざれば、眞の寫生といふべからず。眼に見えた

る以上を寫せ、極めて不完全なる眼にのみ訴へて、其物の感情を表出する事を勉めざれば、物の真相を寫し得べからず。

人體を描くに、たゞ見たる丈けの描寫をなすにも、解剖學の知識を備へざるべからず。風景を寫すにも、猶透視畫法を知らざるべからず。是等の學問は客觀によつて生ずる誤を正す上に必要なるものである。

俳優は只その脚本の人物に粉したるのみにては、觀者の心を動かすと能はず。自己先づ其人物の性情を知悉し、心から其人物となりて技を演じてこそ、始めて其眞を寫し得たりといふべし云々。

一は眼に訴へよといひ、他は心の命に従へよといふ。一は見た通り有の儘を寫して、少しも自己の意志を加ふるなといひ、他は眼は誤多く、且其精神を現はす爲め、寫すべきものゝ心持になつて描けといふ。何れに従ふべきか、初學の士の大に迷ふ處であらう。

されど此論は決して矛盾して居らぬ、双方皆道理ある說で、その何れに従ふべきかは筆を執る人の伎倆の程度で定まるのである。

繪畫を學ぶに客觀的の寫生は尤も必要である。併しこの純客觀、即ち自己を全然沒して物の眞相を見るといふことは、初學の人達には到底企て及ばぬ事である、比較的見易い形の上に於ても、觀念の爲めに比例を誤るのは百人が百人迄同じで、初めての寫生に、假に箱を寫生させると、其箱の上部の面は、畫者の位置からは僅に細く一線をなして見ゆるに掲はらず、幅の廣きものであるといふ觀念の爲めに、必ず實際見ゆるよりも廣く畫くのである、されば初學のうちは、眞の客觀は出來ぬもので、習慣上より来る觀念はついて廻るのであるが、是は是非取去るやうにせねばならぬ。

技術上の新しい發見は客觀的の寫生によつて得らるゝ、常には有り得べからざる現象を、時には視る事がある。白き壁が赤に見えたり、綠に見えたりする。其時は其えた通りに寫すべきではあるが、併し何故に常と異なる現象が見えたかと、其原因を究めることは最も大切であらうと思ふ。

疑は進歩の階梯である。白壁の赤く見ゆるは、光線の爲めか反射の爲めか、線に見ゆるは補色の爲めか對照のためか、何等かの原因は必ずある、それを究めてこそ経験にもなり進歩もあるのである。

寫生してこれ等の疑の起らぬものは、たゞへ何百枚描いても決して發明も進歩もあつたものではない。寫生は眼に視たる瞬時の現象を模するもので、寫眞で寫すのと同様である、併し寫眞のやうに一時に寫し取る譯にはゆかぬ、一瞬の現象を盡くに數時間はかかる、この數時間筆を執つてゐる間は、最初に感じた一瞬間の現象を忘れぬやうにせねばならぬ、懲ふなると純客觀では出來なくなる。

疑を正すは科學的知識に訴へねばならぬ、畫家に科學的知識は決して不要ではない、たゞこれに拘泥しては困るのである。濫りに主觀に流るゝ弊は、客觀に傾くよりは害が多いのである。

物の感じを現はすには誇大といふことが必要である、物の角度を強くするとか、線を太くするとか、色彩を強烈にする等の手段を用ひねば、其物を現はす事が出來ぬ場合が往々ある。スタデーするには客觀的にゆきたいが、スケッチには主觀的で其感じをとるので、平素スタデーを怠つてゐては、よいスケッチは出來ぬ』要するに、初學の寫生は、客觀的に充分忠實にスタデーして、追々スケッチ的感情を寫す方に筆を進めてゆくべきで、スタデーは生涯怠つてはならぬ大切なものではあるが、これ許りではいつ迄たつても眞の繪が出來ず、幼稚な活氣のない、即ち小刀細工的、所謂素人離れのしないといはるゝものになる、併し初めから主觀的にやつてゐては、單調な不自然な、いつでも同じ様な色や形で、即ち型に入つたといふ畫が出來て、何時迄も進歩もなく、只々熟練で見られるといふ許りの詰らぬものより出來ぬであらう。

序に注意して置たいのは、一枚の繪にしやうと思ふ寫生をする時は、先づ其場處が極まつたら、最初によく寫すべき自然の有様を熟視し、出来る丈け觀察して、先づ心の中に其繪を作り、而して後に筆を執るといふ事にしたい、漫然着手して、一筆毎に迷つたり疑つたりしてゐては、到底満足な結果は得られぬものである』恁んな話がある、ある同級の畫學生が二人、隅田川に寫生に往つた、一人は早くも好位置を見出して、早速寫

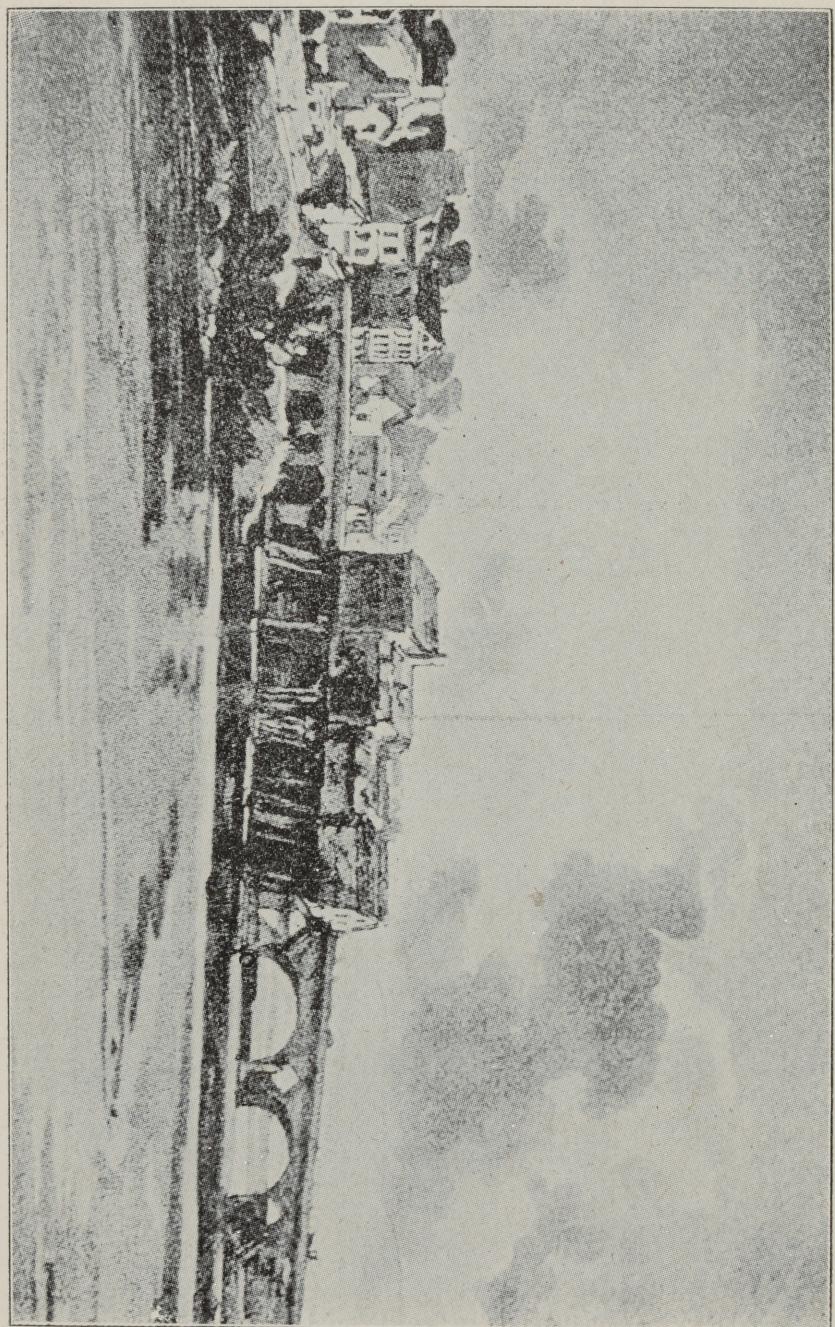
生に取掛り、ズン／＼塗つてゆくのに、他の一人は三脚に腰を下して、只ジット景色を見てゐる許りである、そして翌日も、同様で、漸く第三日目から初めて筆を執つて、其日のうちに仕上げて仕舞つた、さて其成績は如何にといふに、三日前から始めた人の繪よりも、一日丈け筆を持つた人の繪の方が遙かに結果がよく、其景色の感じが充分現はれてゐたとの事である、これは事實談であるが、寫生家にとりては有益な物語ではないか。

旅行の注意

林學博士本多靜六先生曰く、旅行には荷物を多く持つのは甚だよろしくない。途中如何なる艱難に逢つても恐れていけぬ。如何なる猛獸野蠻人も虚心平氣な顔をして暢然と歩く旅行家をは奢めはせぬ。

いかに空腹でも登山の途中で食事するのはよくない、腹が脹れると氣勢が盡きて仕舞ふ、山巔迄達する事が出来ぬ。

「登山には道を選ぶな、迷ふとも頂上は一なり、下山には注意してよく調査せよ、間違つたら再び頂上に戻りて更に下り直せ、一點の誤ちは千里の誤となるべし」とは西洋の探險家の言なり、これは必要のとである。木曾の御嶽に登りし人が、下山の際一點の間違で飛驒に下り、三晝夜食物も得ずして麓を彷徨し、漸く信州へ出たりといふ。この時は谷に陥ちて身を傷けしものもあり、空腹のために蛙迄も食せりといふ、下山の際は注意が必要である云々。(探險世界)



「アルフレッド、イースト」氏

の寫生談(承前)

石川欽一郎

それから又寫生をすれば自然に對する知覺力が段々進歩すると云ふ得が有ります、故に寫生中に起る瞬間の感じも、直ちに之れを捕へると云ふ用意が幹要です、雲が來て影が地上に落つると云ふような場合、一寸した事で有つてもそれを寫さぬといかぬ、それで一の色と他の色との關係が、實際と違はぬようにつて居れば、茲に品位と云ふものが生ずる、つまり寫生なるものは寫家に取つては、自己の畫に對する終局の目的に向ふの手段に外ならぬのであります、スケッチは單に未成の畫ではいけない、須らく我が觀察の確信、活動と敏速とを現はすべきである、丁度人間と云ふ機械で取つた早取寫眞のようなもの、寫生と寫眞と違ひ處は、寫眞は死んだもので有るが、寫生は活きたもので、君が親しく目撃して得たる感想の活現したもので有る、畫學生が自然に對し適當なる觀察を下すようになり、稍や困難なる題目を捕へんとするの勇氣も生じて、又た之に成功するよになれば、更らに他の方面へ考へを及ぼすようになる、即ち畫材の選擇と云ふことで、之が極めて大切な事であります、寫生畫即ちスケッチと、習作畫即ちスタディーとの異なる處は、寫生畫の方は瞬間の感じを直覺、迅速に現はしたもので、習作畫の方は畫材を一々丁寧に畫ひたものである、それで出來上つ

た畫と云ふものは、此兩方を併せて居らなければならぬ、即ち丁寧な習作へ以て行て、活動直覺の寫生と云ふものが加はつて出来る、之は能く心に留むべき事であります、即ち寫生では、時々刻々に變りゆく瞬時の感想を現はすので有つて、君に充分の記憶力があれば、此場合に於て其感じを啓發することが出来るが、記憶力が乏しければ、其寫生は價值のないものとなる、それは色と色との關係が不正確になるからで有ります、寫生するに當り、君の着想に主と従とあるのです、主と云ふのは即ち品位と云つて、色と色との絕對的關係の眞理であります、早い談が、物の形ちは變らぬことを常に覺へて居て、其感じが時々刻々に遷り行くに注意してみたまへ、機敏に觀察すれば、今まで君が氣付かなかつた數多の美が見へてくる、往來を歩るきながら、夕日の空の金色が雨上りの道へ映する様や、人や馬が踏付け行く泥濘へ、綠青色の空が寫つた處を見ては、實に金錢には代へがたい面白さで、他の人の之れを窺知ることが出來ない、僕は嘗て汽車で旅行をした途中、美しい夕暮の景色を見たのを今に忘れませんが、實に盛んな着色で、何とも云へない立派な景色で有つたが、同車の誰一人として之れを振向く者も無い、そこで僕は傍の人に向つて、之れが若し水昌宮の御所で、こんな美しい景色をこしらへ、錢を取つて見せることとしたならば皆見に行くだろうが、神が只て作つたもんだから、誰も見ようとはしないと云つたことです、

一つ君に覺へて居てもらひたい事が有ります、尤とも強ひてと



「アルフレッド、ヨースト」氏

の寫生談(承前)

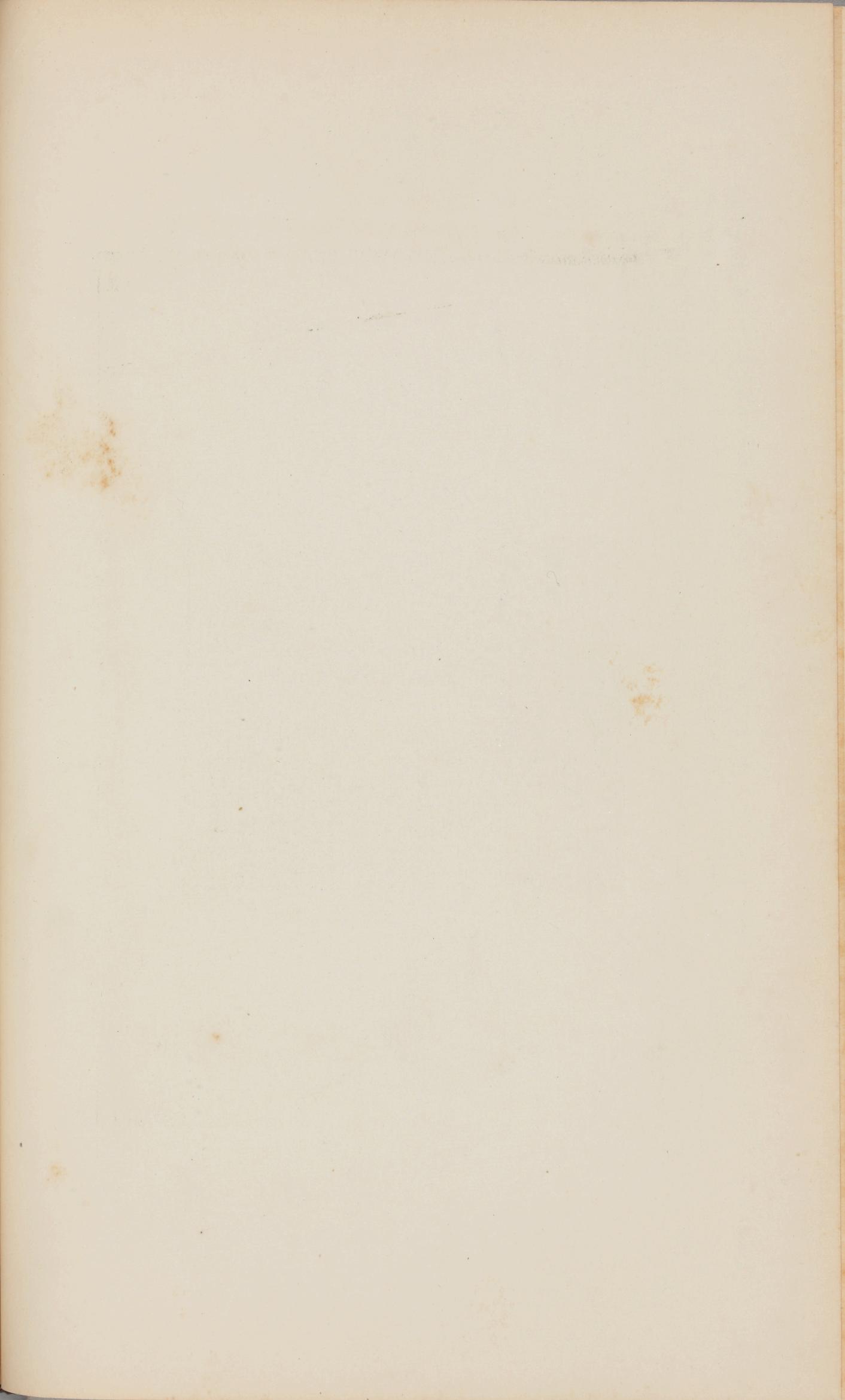
石川鉄一郎

それから又寫生をすれば自然に對する知覺力が段々進歩すると云ふ得が有ります、故に寫生中に起る瞬間の感じも、直ちに之れを捕へると云ふ用意が幹要です、雲が來て影が地上に落つると云ふような場合、一寸した事で有つてもそれを寫さぬといかぬ、それで一の色と他の色との關係が、實際と違はぬようにつて居れば、茲に品位と云ふものが生ずる、つまり寫生なるものは畫家に取つては、自己の畫に對する終局の目的に向ふの手段に外ならぬのであります、スケッチは單に未成の圖ではいけない、須らく我が觀察の確信、活動と敏速とか現はすべきである、丁度人間と云ふ機械で取つた早取寫眞のよなもの、寫生と寫眞と違う處は、寫眞は死んだもので有るが、寫生は活きたもので、君が親しく目撃して得たる感想の活現したもので有る、畫學生が自然に對し適當なる觀察を下すようになり、稍や困難なる題目を捕へんとするの勇氣も生じて、又た之に成功するようになれば、更に他の方面へ考へを及ぼすようになる、即ち畫材の選擇と云ふことで、之が極めて大切な事であります、寫生畫即ちスケッチと、習作畫即ちスタデーとの異なる處は、寫生畫の方は瞬間の感じを直覺、迅速に現はしたもので、習作畫の方は畫材を一々丁寧に書ひたものである、それで出來上つ

た畫と云ふものは、此兩方を併せて居らなければならぬ、即ち丁寧な習作へ以て行て、活動直覺の寫生と云ふものが加はつて出来る、之は能く心に留むべき事であります、即ち寫生では、時々刻々に變りゆく瞬時の感想を現はすので有つて、君に充分の記憶力があれば、此場合に於て其感じを啓發することが出来るが、記憶力が乏しければ、其寫生は價值のないものとなる、それは色と色との關係が不正確になるからで有ります、寫生するに當り、君の着想に主と従とあるのです、主と云ふのは即ち品位と云つて、色と色との絶對的關係の眞理であります、早い談が、物の形ちは變らぬことを常に覺へて居て、其感じが時々刻々に遷り行くに注意してみたまへ、機敏に觀察すれば、今まで君が氣付かなかつた數多の美が見へてくる、往來を歩るきながら、夕日の空の金色が雨上りの道へ映する様や、人や馬が踏付け行く泥濘へ、綠青色の空が寫つた處を見ては、實に金錢には代へがたい面白さで、他の人の之れを窺知ることが出来ない、僕は嘗て汽車で旅行をした途中、美しい夕暮の景色を見たのを今に忘れませんが、實に盛んな着色で、何とも云へない立派な景色で有つたが、同車の誰一人として之れを振向く者も無い、そこで僕は傍の人に向つて、之れが若し水昌宮の御所で、こんな美しい景色をこしらへ、錢を取つて見せることとしたならば皆見に行くだろうが、神が只て作つたもんだから、誰も見ようとはしないと云つたことです、

一つ君に覺へて居てもらひたい事が有ります、尤とも強ひてと





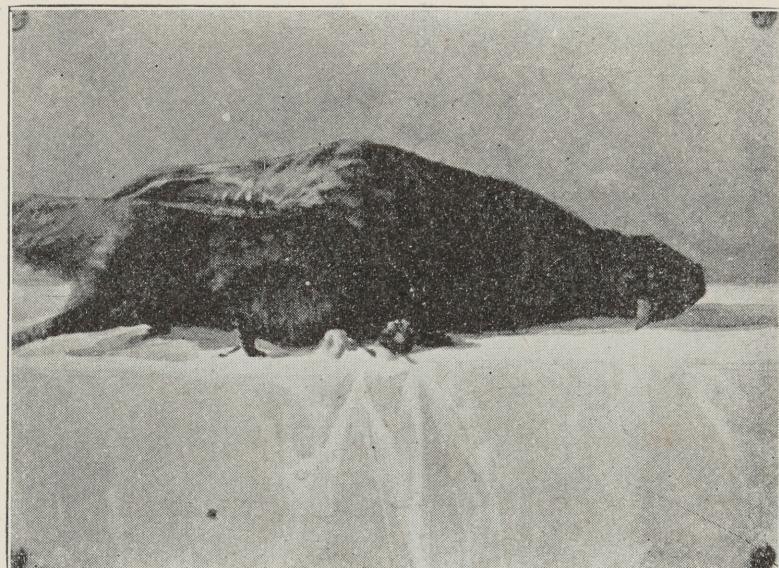
云ふ譯には行きますまいが、朝でも晩でも始終寫生することです、僕は數ヶ月の間毎朝空を寫生しましたが、少し空と云ふものが分つて來たようです、又た數年間樹木を寫生し、それが爲め樹木に付て稍得る處がありました、こうやつて居ると、樹木が如何にして生育するか、如何に地面から生へるか、如何に水分が幹より葉へ傳はるかと云ふことが分つて來ます、樹木は、丁度花の庭園に於けるが如く、地面を飾るのであります、景色畫家は自然を訪ねて、我が爲めに捧げられた畫材を選擇するのですが、其畫家にターナーのような充分なる熱誠と云ふものが有れば、山をも捕へて來ることが出来るが、この熱誠の無い畫家ならば、いつそ止めて石でも割つて居たほうが多い、何んでも、熱誠、確信、勇氣、此三つで、他は皆な求めずして到るのです、右の三つのものがあれば、先づ寫生家として半ば成功したものでせう、ターナー、コロー、クロード其他の大家は、自然に於ける心體とも云ふべき大事などを教へてくれた、何んであるかと云へば即ち、活動、物と物との正確なる關係、全體の統一、これです、此三大要素は、コ



(一) 長野講習會成績

ロードに於ても、亦た他の畫家に於ても、皆凡て總合的に現はれて居るのです、寫生するに當ては、細かい部分に釣込まれてはいけない、之れは往々不用意から陥ることで、何んでも畫の一一番大事のことは幅である、眼を能く開けて自然に對すれば大なる事實を見るべせう、千の小さい誤は、いくら丁寧に畫けて居ても、一つの大なる眞實とはなりません、美術は實際上期する處の目的は只一つです、即ち示すと云ふことです、若し君が言葉で示す事の出来ないものを示すことができ、併かも自然の美趣、光彩までも、共に持つてくることができたならば、慥かに君は自分にも非常な愉快を與へたと云ふものです、人は僕に畫家になつて仕合せだと云ふ、之れには僕も同意するが、併し未だ嘗て畫は樂なものだと云ふ畫家は一人も無からう、寫生家は失敗の苦を忍ばなければいかぬ、之れが大切なことで、終には腕が不知識思のまゝに動くようになると、こゝに初めて寫生の妙味が分かる、畫家は須らく上手な寫生家で、其指の先きには自然の萬象を有すと云ふ様になりたい、寫生の畫家に記憶力を増進

せしめ、又た物の性格と云ふものを教へるのである、同じ樹を五十遍も寫生して漸く其樹の性格が分るでせう、どう云ふ風に生へて居るとか、どんなに曲りくねつて居るとか、風當の爲にどうなつたとか、これらは寫生してゐる間に樹が君に言葉を交はし、其來歴を談すのです、併し通行人は知らずに通つて、つまらぬ樹だと云ふ、成程材木にしたらば五圓か十圓のものだらう、併し君に取つては猶遙かに價值がある、否實に錢では買へないので、金さへあれば何んでも買へないものは無いと思つて居る人も多い、併しそう云ふ人は、最上等の品物は君が取ることさへ出來れば、皆君のものであると云ふことを知らな



長野會講習成績

(二) 支那人と色彩
意味の分りにくい處あらば遠慮なく聞いて下さい、委しく説明致します、

い、併し若し君が之を取ることが出來ないならば、決して寫生家などにならうとは思ひたまうな、

アルフレツド、イースト、

○意味の分りにくい處あらば遠慮なく聞いて下さい、委しく説明致します、

欽

支那人と色彩

○紅色 吉、賀、祝等の場合に好んで用ふ、特に結婚の際は専ら此色を用ふ。

○黃色 帝室用として、皇室以外は滿洲僧侶及道者の外は使用を許さず。

○青色 黒 此兩様は上下差別なく用ふ。

○藍色 一般に廣く用ふ。

○紫色 官吏紳商等は藍色と併せ其衣服に用ふ。

○灰色 大商人は藍と併せ用ふ、小商人、一般の身分なきものは共に此色を用ふ。

此外

○湖月色(淺黃)。洋妃(とき色)。葵綠 紳月等好んで之を用ふ。

○石青(紺)。羔綠(濃綠)。桃紅(桃色)。荷灰(銀鼠)等も好む。

○白色 不祝儀の色彩にして、獨り祭葬の場合に用ふ。故に家具其他にても如何なる木質のものも必ず色附けるを常とす

云々。

右は重に北清貿易上の注意として、太平洋に掲載せられしものなれど、一寸面白ければ抜萃したり。

トーマス、ギルチン「上」

青人

トーマス、ギルチンは一七七五年二月に生れた。普通ターナーの生年月としてある月より二ヶ月程以前であつた。天才畫家二人の生年月が全期であつたと共に英國水彩畫諸派の開祖として美術史上の關係に於ても離るべからざるものであつた。

ギルチンとターナーとが青春時代に共に技を競ふて研鑽せる頃、主導者はターナーではなくて、常に固くギルチンの手にあつた。實にギルチンは二十七年の短生涯に於て大膽に自重ある熱心な勉強家であつた。若し夫れターナーが一八〇二年十一月にギルチンと共に

早世したならば、ギルチンの名はターナーの上に出て、高かつたに相違ない。ターナーは猶餘命を保つて、ギルチンの逝いた後殆ど半世紀を創作にめたので、其名聲を保つて居る。しきこれにはギルチンが新畫風開拓者としての貴重なる指導のお蔭を蒙つて居ることはいふまでもない事である。試にパーリング



水彩畫講習所忠三月例會第一等筆

トーン・ハウスに於けるデブルマ・ギヤラリにあるターナーの有名な畫のドールバーデルン(Dörlbadern)を見給へ。一見してギルチンらしい處が見える。圖柄の華美なる處筆致の温健なる處皆ギルチン風である。ラスキンもターナーが青春時代に於ては己が天才よりはギルチンの指導に負ふ處の多かつたことは疑を容れない。猶其他の美術批評家も全じ事を認め居る。

ターナーの病は部分的にエフェクトに餘り巧妙に過ぎて、圖柄が混雜する傾きがある。この爲にターナーの畫の偉大なるを疑ふものはないが、餘りに混雜して散漫である爲めに眼が迷ふ程である。想像的の組立に於ては驚くべき豊富さが諸處に歴然として見えるが、屢々これが統一を缺いて居る。ターナーが自身に言ふた否、言ふたと傳へられる言に、わが繪はギルチンに及ばざること遠しとある。この言がターナー自身の言であるかないかは措いて、ターナーの水彩畫に對しては蓋し適評であるのである。

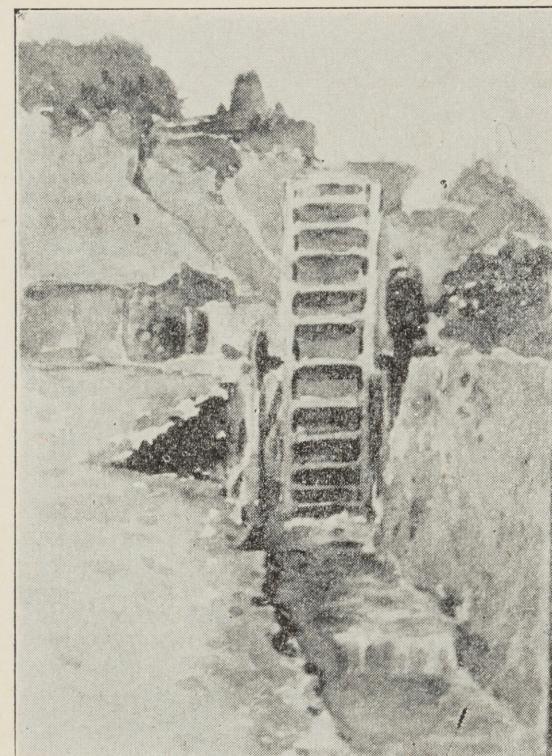
菱花灣日記

〔三〕

四 燕

二月一日 晴、港へ出で見るに出船入船いと繁く、狹き濱邊は人あまた集ひ居て三脚据ゆべき場處もなし。去つて町を東に山路に入る、磴道幾百級、みな岩を刻みしものにて道は急なり、山を越ゆれば村あり、岩井袋といふ。三方絶壁に、只西の方僅かに海に接せり、水靜かなる小灣を圍める漁村幾十棟詫しげに建てり。更に一の峠を越ゆれば高崎といふ町に出づ、この地鹽水汲むべき井戸ありて夏は温浴の設けあり、旅宿も稍や見るべきものありといふ。

道ありとも思へぬ浪打際を小浦の方へとゆくに、大なる巖を前景として寫さまほしき景色あり、風寒けれど繪具箱出して一枚を得つ。近くに海苔搔き居りし子供等の、いつか吾が背後に來りて、水の色岩の形に頻りに感嘆の聲を放ち居たりしが、其内の一人『この繪は一錢位すべい』といふに、他の一人は『馬鹿曰ふな百圓グレーするだア』と、この小さき鑑定家は、忽ち評價に非常なる懸隔を來して互に相争ひぬ。



大橋正堯筆

三度山に入りて到る處梅花の美しきを賞でつゝ、山人に那古への道を問へば、これより後へ半町程左への道あり、今方荷を積みし牛のゆきし故、それと共にゆかば自から里に出づべし、急ぎ給へといはるゝまゝ、戻りて見れば又も上りの山道なり、牛の瓜跡も僅かに見ゆ。

道の漸く下りに向ひし頃遙かに牛の影見ゆ、急ぎその跡を追ふに、この牛四五束の薪を負ひ、後ろよりゆく農夫に竹の鞭もて尻を叩かれ、牛の歩みのそれならで馬よりも早く、つゞら折なる山路に屢々其姿を見失はんとしたり。

さはれ鷄口となるも牛後となる勿れといふ諺あり、いつまでか

忿る醜き小牛の跡に立たんや

と、大勇氣を奮ひ起して危ふき坂路を馳せ下るに、道は漸く一人を行く程の狭さなれば、褶抜て先づるとかたく、終に南無谷ナムヤの村迄蹄の塵を浴びぬ。

漁村を過ぎてまたも山を越せば豊島なり、富士も見るべく、海には島もありて風光佳なり。これよりは平地を、多田良、船方、那古、湊、八幡と、順路を五時過る頃戸松の家に歸りぬ。

二日 少しく雪ふる、加知山へゆきし折、家の屋根に藁にて造に相争ひぬ。

りし輪の置けるを見たり、故ある事もやと主翁に問へば、このほとりにては、新婚の折ホカイとよべる桶に餅を入れて祝ふが例にて、其ホカイの縁にかの藁の輪を乗せ、餅を高く盛上るなりとか、家根の上にこのものあるは新婚ありし印なりといふ。

三日 晴、節分なり。豆まきは正午過る頃より始まり、かなた此方に福は内の聲にぎはし。

四日 曇、海を寫す。

五日 曇、北上臺の社殿を寫す。

六日 晴、船を寫す。

七日 雪あり、羽鳥氏と共に東海岸にゆく約あり、毎日待てども來らず。

八日 晴、久しく厄介になりし戸松の家を辭して、羽鳥氏と共に根本さしてゆく、館山より三里の道なり。羽鳥氏の知人ある海潮寺に宿かる、寺には年若き住職と、七十餘りの起居不自由なる老訥一人あり、拭き掃除より勝手元迄、住職一人の業にて、夜に入りては村の子達に四書の講義もなすとか、中々に忙しげなり。

長き廊下を傳ひて、奥まりたる處に吾が臥床は設けられぬ、後ろは本堂なるらし、夜半の風荒れて破戸自ら聲をなすに、淋しさ怖ろしさ云はん方なし。

九日 雨、雷鳴あり。食事のおり膳の隅に白布の濕れたれる置けり、口拭ふためにもやと思ひしが、こは食器をこれにて拭ひ、その儘洗はぬ輕便法なりし。

午後より大雨となり雷鳴烈し、さきつ年此村の子守達、雨を避けて鎮守の神樂堂に集まりて遊び居りしに、俄に雷落ちて、三人迄も非業の最期を遂げたりといふ。さて今日の雨も容易に歇



長野講習會成績

まぬに、僧は小降になりてから米磨からんとて、終に夜に入りぬ。夕の食事の膳に就きしは夜半に近き頃なりし、吾は徒らに勝手元を眺めて、仙代萩飯焚の場を想へり。

十日 晴、西風つよし、海岸にゆき見るに、怒濤狂瀾館山灣の

比にあらず、この風一日にして歇むべきにあらねば、午後より出發に決す。食事の度毎に強らるゝ大根汁にも最早飽きたれば。

風に追はれて半ば走りつ、白濱もいつか過ぎて、千倉の旅舍渡邊に着きしは四時を過ぎたり。今日は濱方休みにて、時經たば混み合ふべきに、早く風呂に入り給へといはるゝまゝ、急ぎ浴場さしてゆき見れば、セピアにて塗りしかと思はるゝばかりの黒き人々、狹き浴室に満ちゝて、湯槽には脚を入れるべゝ透間さへなし、そが中には年若き婦人さへ混り居るに、益々呆れて脆くも退却しぬ。

十一日 晴、左に小山を、右に海を眺めつゝゆくと二里、丸山川とよべるあり。九日の雨に水嵩増して、橋は流れ、濁流岸を洗へり。籠負ひし女子共の笑ひ興じつゝ川を涉りゆくに、他に道なれば我も足袋脚袢を解きて流れを亂しぬ、川幅二十間に餘り、寒冽たとへ難し。

波太島のほとり、思ひし程景色よからず、スケツチ一二を試み、
ナブトそれより道を急ぎて、鴨川、濱荻も空に過ぎ、天津の井筒屋といへるに宿る。この家取扱極めて鄭重に、枕元には水瓶にコップ、蠟燭マツチの類を置けり。

十二日 曇、小湊誕生寺を見る。鯛の浦は彼處ぞと里人に教へられしが、岸よりは鮮けき鱗の影も見えず。此處より勝浦迄新道あり、興津に至る一里の間、一方は海に一方は絶壁にて、岩の質脆きためか、折々崩れ來りて行路危ふし。興津は景色よき

處なり。近海昨日より鰯の大漁なりとて、何處の漁村も鰯ならぬはなく、乾鰯にすとて砂濱に晒せるもの、恰も多摩川原に砂利ゝ光れるがごとし。舊暦歳の暮とて、市たちて賑ひし勝浦の町を過ぎ、白鷗群れ飛ぶ御宿も跡にし、畫かまほしき景色に富む大原の海も見捨てゝ、陣急がせて、上總一の宿に着きしは薄暮の頃なり。宿を東金屋といふ、客多くして室を得がたく、川村畫伯の親類なりといふ某辯護士と一夜を共にし、同畫伯にかかる面白き話の數々をきゝぬ。

十三日 雨、滯在。

十四日 晴、陣を雇ひて北飯塚に知人を訪び、大綱より汽車、夜に入て家に歸る。房州根本の湯は、既に梅花地に委し、菜の花盛りなりしが、上總は稍寒く、下總に入つてはまた花を見ず、地上雪ありて寒風膚を刺せり。春より再冬に戻るれか旅なればこそ。(終)

蛇の急所

蛇の大小に拘はらず頭から約一寸程下つた處即ち首ハ附根の脉を打つてゐる處を打てば直ぐ死ぬ。

歯の毒

蝮に噛かまれたら直く一番近い處を固く縛つて又少し隔つた所をもう一つ固く縛る、そして噛まれた處を突て血を抜とよい、紺氣のものは蛇の歯の毒を消すから足袋脚袢の類に紺を用ゐると痛みだけで済む、但真紺でなくてはいけぬ。(趣味)

寄　書

講習會雜感

長野 S. K.

近來我國人の趣味嗜好非常に向上し來れる

と同時に洋畫殊に水彩畫に對する觀念も亦

た昔日の比にあらず、從つて其の趣味も著

しく普及し、やがてその餘波我長野市にも

及び、此數年間に夥しく同好者を増した

り。余も實に其一人なり。一昨年萩生田文

太郎氏暫らく我市に逗留せられてスケツチ

會成り、同年繪畫展覽會催されき。之れ實

に空前の事なりき。されど萩生田氏の歸京

と共に會は解散し、其後身とも云ふべき二

水會は成りぬ。而して昨年は信美會により

第二回の展覽會も開かれ、東京名家の作品

も數多陳列せられぬ。經歷は云ひ得べくん

ば繪畫の嗜味發達に於ける當市の歴史は實

に短日月なれども其氣運や日進月歩の勢な

りと云ふべし。さればこそ昨年末數名の熱

心家發起となりて同志を糾合し、遂に今回

時日及び會員　講習會は一月二日より十一

日迄十日間、當市師範學校を會場とし、會員凡そ四十人餘、就中小學校教員最も多く、學生次位を占め、其他諸方面の人を網羅し、婦人も名ありしは萬綠叢中紅二點とやいはまし。

大下先生の溫厚、丸山先生の爽快、吾等は其溫容爽姿に接したる間もなく直に送らざる可らざりき。嗚呼その時の感、何等かの不幸に陥るが如き懷に堪へざりき。恐らくこは一度先生に接する者の等しく感ずる所

日程、経過、名に負ふ冬の信州とて白暁々

の銀世界、色彩の單調をかこたんよりは凍

筆呵せんにたよりよからぬ郊外寫生——自然

界の研究は竟に不可能、日々材料を替へて

大方時季に關係せざるにより往々等閑に流

れ易きものなり。さるを、こゝにこれを得

だりしは復得易からぬ機會と云ふべし。夜

分は一二時間先生の講話を拜聽し、尙有志

は木炭畫の研究をなせり。かくする中に樂

しき十日間は呆氣なくも瞬間に過ぎ去りぬ。

感概、先生方の熱心なる早朝より晩く十時

頃迄も少々の休憩もなく東奔西走、殊に會員多數のこととして極めて初步の者より種々

の階級者を含み、亦種類も様々ありしにも

係らず先生倦まず厭はず、一意專心指導せ

られたる懇篤なる教導實に感謝の辭なきを苦しむ。亦大下先生の來援せられたる一時

丸山先生は十二日に歸京せらる。

は如何に吾等を奮起せしめしぞや。或る者嘆じて曰く「實に獻身的だ!」と。之を以て見ても如何に先生方の熱心にして吾等を感奮せしめ鼓舞せしめしかば察するに難からず。

尙又、吾人の快感に基へず吾人の意を強うせしめしは小學校にありて教鞭を執らるゝ諸君の多かりし事なり。それ兒童教育と繪畫、人間基礎の半面を作る小學教育と繪畫の關係、其密接なる事、吾人茲に多く辯ずるの要なし。畢竟人は四圍の感化影響を脱する能はず。殊に感化の大なるは幼少時代を以て最とす。自然の感化、偉人の感化、或は良家庭、惡家庭の兒童に及ぼす影響皆是なり。是を思へば人を教ふるの道にある者の責任亦重大なりと謂ふべし。兒童は彼等の手により什麼様にも作り出し得べし。然るに斯の道にある教員諸君の多數なりしは最も喜しき現象にして、進んで高尚なる趣味を養ひ人格を修養さる、縱令無爲なりとも其感化の及ぼす所、推して知るべきのみ。吾人は我國人の趣味教育の幼稚なるを必ずしも悲觀せず。前程を憶ひて期待する

所あればなり。遠からず趣味の普及、小アーチスト、小アマーチューアの出でん事疑を入れず。薰陶の重任を負はるゝ敬愛する諸君、願くば斯道の爲、奮勵一番以て吾人の囑望期待をして空しく水泡に歸せしむる勿れ。至囑至囑。

今後の覺悟、希望、吾等は今回競争は實によき進歩の動機なることを感じたり。丸山先生の説に是迄先生の經驗によれば、如何なる現象にや講習會等などありて著しく進歩したる者も、やがて郷に歸れば時日と俱に進歩すべき筈のものが、事實は之に背馳して往々退歩する傾ありき、想ふに競争者なく己惚心の萌すによるならんかと。之れ吾等にとりては實に頂門の一針、吾人は覆轍の前例に鑒み以て規戒とすべきなり。何事にまれ小成に安すれば大器は成らず。況や一時も修養研究を忘るべからざる、技術想意の圓滿完備を要する繪畫に於てをや。修養は吾人生の畢る迄も踏むべき道なり。研究的態度の失せたる時は退歩の時なり。吾人は心の手綱弛まざらむ事を期せざる可らず。

尙茲に吾人牢固たる覺悟決心を持して諸君と俱に盡力を要すべき一事あり。そは吾邦人、大人の趣味の缺陷にあり。假令趣味の下劣なる時代に生育したればとて事々物々の由來する所ぞや。吾人は彼等を高尚なる趣味に導かんと欲するものなり。事甚だ大言壯語に似たれども何ぞ空論に歇まん。我等乳臭兒如何に口を極め言を盡して彼等に一美を説き趣味を言ふも彼等は耳を傾げざらん。釋迦に説法と聞き流さるゝはもとより覺悟のことなり。誠に以て已を得ざることなり。されど吾人は云ふ甲斐なしとて措くものにあらず。微少なりとも胸奥の趣味の琴線にふれたらんには何時かは美性發動して、美を樂しみ趣味を解するの世運に向はざるべき。吾人は斯道の爲彼等の耳底に達する迄絶叫すべし。願はくば忠實なる斯道の紹介者たらん哉。

終に臨んで兩先生の勞を謝し、併せて主催者諸彦の斜旋の勞を謝し、尙會員諸君の健畢を祈る。

僕等の福音

北多摩川山本野翠

先頃友人の晩韻子が大下先生のところへ参つたおり、いろいろと、お説話を頂ひたそうだが、その時先生は『まづ水彩を學ぼうとする初學者は、郊外の漠たる寫生をするよりか、むしろ小範圍内に限れる一木一草とか、芝生とか、または、土橋、垣根、燈籠、岩、石等の一小部分を一個々々、精密に着實に寫生したならば、他日人の模倣しえざる獨得の發明、や、熟達をとげるだらう。』云々と、呉れくのお説諭であつたとのこと。

感謝

月草生

あゝ！ 僕等のやうな初學者にとつては、何と云ふ尊とひ福音でしやう。

卅四年夏病んで或海水浴場に加養の身となつた折、愛讀して居た文庫に、大下先生の水彩畫の葉が廣告されて居るのを買つたのが水彩畫に志した動機で、昨春『みづゑ』九號に接し、再び各枯れて居た嗜好が萌芽を合し、日曜も祭日も無い多忙な職業の寸

閑を盜み得ては彩筆を弄して悽しんで居る、殊に往診の途上、自然の光景を研究すれば其苦も知らず、一二里も敢て遠くは無く、無趣味な山路も大に趣味を感じ愉快である。又職業上に利益を興へたのは觀察力の養成で、殊に診斷の粗略を精密ならしめたのは、又畫に志してから的事で、大に感謝して居る次第である。又別問題であるが、僕は大下先生を木下と讀んで居たが、此頃始めて氣がついた。

開　　書　　本　　郷　　紅　　生

小生は太平洋畫會に對して常に同情を有するものに御座候、今春開かるべき東京府博覽會には、小生の常に敬愛する太平洋畫會諸君の作品を澤山拜見し得べく樂しみ居候、殊に小生の最も敬意を表する春鳥會諸先生の水彩畫を拜見するを楽しむものに御座候、而して諸先生の上に名譽の榮冠の下らんとを冀ふものに御座候、然るに今日發表せられたる審査官なる人々の顔振を見るに、小生の記憶する處にては、太平洋畫會に屬する人は一人、巴會一人、會に關係な

右はみづゑ紙上を汚すべき種類のものに無之候へ共、小生と同感の人も可有之存候間、何卒々々來月の紙上に御掲載の上御意見も御示し下されたく候。

三月六日

御同情を謝す。吾々の博覽會出品は趣味の普及が重て、名譽心の満足を得るためにあります。又心配になる程不公平のともあるまいと信じてゐます。(春鳥會同人)

*

*

*

*

*

*

會 告

▲其後の入會者左の如し

宇都宮市馬場町二十六

賛 石田富造

安房國北條町六軒町

賛 白井保格

熊本縣葦北郡水俣村

賛 德永正

神奈川縣小田原早川口鶴屋方

賛 佐藤和治

▲贊助會員鈴木建二郎氏は大阪市東區京橋

二丁目二番地へ同吉田喜藏氏は東京赤坂區福吉町一、伊勢忠支店内へ何れも移轉せら

れたり

■ ■ ■

□追々寫生の好時節と相成候、同時に寫生家にとりて大々的禁物なる毒虫が横行致し始め申候、殊に困却するはズヨ若くはズトと稱する小虫にて、手といはず脚といはず攻撃し來り、然も厄介なるは眼の先にてク

ル／＼廻るに候。

□毒虫の豫防法としては、手には手袋を用ひ、脚は脚弁に足袋といふ仕度を致候へはよろしく候、ある人は夏季用として、白力ナキン一重の薄き脚弁を造らせ、寫生の時丈け用る居候。

□曾て蛇姫ひの人が、安線香を自己の身邊に立て、攻撃を防ぎし様本誌に投書有之候、

線香を身の廻りに立つるはチト變なものに候、煙草を燻するは一時の功あるも永續出來ぬものに候。

□モチダサと稱する草の汁を手足に塗り置けば毒虫は止まらず、又刺れし跡にも功ありとの事に候、アルボース石鹼もよしとの事に候。

□目の前でクル／＼舞をする奴は、近頃賣つてゐる頭丈げの蚊帳を用ゐるより他に證方あるまじく候。

□讀者諸君にして、何かよき豫防法の御實驗、又は御考案有之候はゞ、自他の爲め御一報下され度希望致候。

□次號には新歸朝者吉田博氏令妹藤尾嬢の寫生されたる西班牙アルハンバラの水彩畫を原色版にして掲出可致候。

□猶右の圖に添へて吉田博氏のアルハンバラに關する談話を乞ふて讀者に御報可致候。

□東京勸業博覽會開會に付御出京の本會々員及び地方讀者諸君は一度水彩畫講習所へ御立寄被下授業の有様等御一覽被下度同所は毎日曜日開講致居候。

編者より

○長野小林氏へ 色鉛筆は何れも面白し、田を畫ける方前景一工風ありたし○岡本氏へ 雪景はあまりに硬し、一々色紙を切抜て貼つたやうなり、樹木はよし。鉛筆畫は線に變化なし○海老名氏へ 色彩華美に過ぐ、モット落ついた色は出ませんか○吉井氏へ 感じはよく出たり色彩に變化なきは惜むべし○高橋氏へ 岩見川は色彩貧し、

いくら雪景にても今少し變化を見出されし、和田村は人物小なり、この位置にあるなら少くとも倍大にならねば比例がとれぬ

○北海道小林氏へ 競技會は四月開會につき四月中旬頃なら福壽艸位ひは開きそなうな

要塞地寫生願ひの書式

△要塞地（三浦鎌倉地方）を寫生するには左の願書に返信郵券三錢を封入して在横須賀東京灣要塞司令部へ宛て出願さるべし横須賀近傍（第一區）は到底許可にならざるもの逗子や鎌倉近處なら直様許さるべし

寫真撮影（模寫）願（雛形）

一目的 紀念（研究）

一位置 何郡内何町、何村、山、川、

一期限 自何年何月何日至何年何月何日

右御許可被下度要塞地帶法施行規則第四條に基き此段奉願候也

明治何年何月何日

住所 姓 名

生年月

東京灣要塞司令官伊知地幸介殿

問に答ふ

（水彩畫に關係あるものに限る）印は答。
一般に對して利益なきものは載せず。

■1 東京で苦學して出來る繪畫に關する職業の給料順序等を知りたし、但し畫家、教

育家は別として2大下先生の東西社から出た繪葉書は本誌口繪の如き出來榮なりや（長野K.O.生）○1石版の製版師などで、他に適當と思ふ仕事を知らず、製版師は五六

年で一人前となり二三十圓より五六十圓位ひの報酬あるべし、詳しきことは其道の人間に問はれよ2石版としては成功せしものなり■1毛筆線畫を學ぶによき臨本ありや2日本畫にて習得せし線は水彩畫に應用し得べきや（旭川愛讀生）○別に適當と思ふ臨本なし尤もドノやうな繪をかくのにも（模様でも漫畫でも）一通り黒繪の正しき線や濃淡の心得なくしては立派なものは出來ず、夫故矢張り鉛筆畫を學ぶ必要あり2水彩畫は無線であるから其儘應用は出來ぬが、日本畫の線を動かすことは筆者の工風にあるべし■1水彩畫階梯に夕の空を寫すに「夫より上部に漸次色の劣りし黃色」云々とあり其黃色は何なりや2要塞地寫生の許可を得て寫生したものは完成後當局者に一見を乞ふ可き者か3反對美とは何を

申にや4葉書大の繪畫を送るには如何にしてよきか5ローシー、バアントシーナ等

使用する時小粒を生ず如何にしてよきや6調子の高き又は低き色とは如何なることに

や（曙町晚秀生）○1此際の色の劣りしいふは明度の劣りしといふ意味、即ち上部にゆくに順ひ色の暗くなるをいふなり2許可證の裏面にある通り3多く用ゐらるゝ言葉にあらず、只反對美とては不明今少し詳しく問はれたし、色の反対によつて美を生するは、例へば赤の傍に縁といふ様に剛性的美を見るべく、濃淡の反対としては純白の傍に真黒といふが如く反対によつて美觀と呈することあり4普通郵便にても開封にても可なり、但開封の中へ郵券を共に入るべからず5繪具の古き爲ならん練直して見給へ6調子の高いとか低いとかは繪の上に云ふべく、色の上では多く強いとか弱いとかいふなり、これは色としては積極的なものは即ち調子の高いので、消極的は其反対なり■1水彩畫法に筆遣ひといふことありや2水彩畫にホワイトを使用するの利害3パステル畫は各店に販賣する蠟

べにて代用し得べきや（二戸T.F.生）○一定せるものなし、其寫すべきものに倣ふて尤

も便利の手段を取れば可なりシホワイト
は不得止場合のほか其儘使用すべからず、
他の繪具と混じて使用するは可なるも手際
よく仕上る事困難なりなるべく用ゐぬ方よ
からん。臘ベといふもの不明、パステル
繪具は隨分高價のものにて且描寫容易にあ
らず。■中學の圖畫教員となるには鉛筆畫
のみにて検定試験を受くる能はざるかニ春
鳥會入會の手續は如何（三宅坂KT生）○
受くること能はず2往復ハガキにて規則書
を取よせ見られよ。■寄送の繪畫にして紙上
に載せられしものには大下先生の御筆の繪
はがきを戴くことを得るのにや（無名生）○
每號會告にある通り優秀なるものに限る。■
透視畫法の書は何がよろしきや初學者にて
も解し得るもの（TF生、KT生）○東京
本町金港堂發行の寺野精一著用器畫教科書
極々の初學者は幾何畫法から始めなくては
了解に苦しむ點多かるべし。■擦筆は如何
なる繪具を用ひて使用するにや。■水彩畫に
バニスを使用する場合は如何又畫面一面に
ニス引の如く塗るものにや。牛脣の使用す

る場合4花木に對する昆蟲の關係を知るに
は如何なる書がよきか。5四季の雲の出る大
概を知りたし。6専門家となるには森羅万象
何物も畫面に上すに博物的に研究を要する
や（神戸MY生）○1チヨーク又はコンテ
1とよばる、鉛筆心のやうなもので光澤の
ない粉をつけて畫くのに用ふ、チヨークは
丸又は角の棒状をしてゐる、それを硬き紙
又は紙石盤の類で磨りて用ふ、色は黒と赭
との二種あり。2重に蔭の暗き處に深みを
與ふる爲めに用ふ、光澤を要する場處、透
明を要する場合3繪具の舒びの悪しきをよ
くさせる爲めなり、併しこんなものは徒ら
に面倒を増す許りゆへ用ひざるをよしとす
4外にそれのみを説きたる書物あるを知ら
ず、博物の本を調べたら期節などは直ぐ知
れるならん常に心掛けて寫生してゐれば甚
しき間違はあらざるべし。5一言にして答へ
がたし、其等も實地寫生に待つ方安全なり
無暗に想像的の繪を畫くことは望ましから
ず。6博物標本的に寫すのは無益なり「水彩
畫を學ぶの順序」を今一度繰返して讀まれ
たい。■チユーブ入の繪具の固くなりした葉
鐵製繪具箱に詰め使用するも色澤に異状な
ら賣るといふ、望の人は僕の處へ送金あれ
(大坂東區東平野町五ノ一八五、福島晚翠)

讀者の領分

注

長文及水彩畫に無關係のものは御断り。
◎印は編者の答。投書の要點のみを掲ぐ。

■海の繪を出して下さい、この間私が品川
沖で寫生した軍艦を書き直しておたら友人
は軍機の秘密を漏らす者だといひました
(晚秀生)○市中で賣ておる軍艦の寫眞
も軍機漏洩ですかね。■僕今日の日課にて
MOONの意義を教師に質し候處そは「マウント」の方
眞又は繪の臺紙なりと教へられ候故「みづ
ゑ」てふ雑誌に「マツト」として書いてある
は如何と反問致し候處そは「マウント」の方
正しきなりと教へられ候間一寸御参考迄に
(本郷大川直助)○御親切を謝す。MOONは
臺紙のことにて、MOONは額縁の中にある
繪の枠であるとのことです。■自筆水彩繪葉
書及ワットマン十六切形水彩風景畫の交換
を願ふ、但し何れも畫面に文字なきを望む
(安房國北條町六軒町白井翠石)■本誌に石
版で鉛筆畫木炭畫ペン畫等を順繰りに掲載
して下さい(KO生)■『みづゑ』二十二は近
來の上出來趣味多かりしは喜ばし(麻布永
坂生)■僕『みづゑ』初號を有す肉筆繪葉書
五枚以上封送先着に進呈す、後着は交換返
送す(播磨國明石郡多聞村朽木快秀)■僕の
友人が『みづゑ』第一(口繪ナシ)を三十錢な
ら賣るといふ、望の人は僕の處へ送金あれ